



日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言	- 1	8. 2015 年度統計関連学会連合大会の	- 8
2. 2014 年度評議員会議事録	- 2	お知らせ	
3. 2014 年度理事会議事録	- 3	9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 8
4. 2014 年度統計関連学会連合大会報告	- 4	10. 学会誌への投稿のお誘い	- 11
5. 2014 年度計量生物セミナーのお知らせ	- 5	11. 2015 年度日本計量生物学会賞および	- 11
6. 計量生物学講演会, 計量生物学ワークショップのお知らせ	- 5	功労賞候補者推薦のお願い	
7. 2015 年度年会のお知らせ	- 6	12. 編集後記	- 12

1. 巻頭言「40 代後半から 50 代前半の企業の統計担当者へ」

小川 幸男（日本イーライリリー）

来年 1 月末で定年を迎えるにあたり、この巻頭言を引き受けたわけであるが、統計関連の話は他の方にお譲りし、ここでは私自身が 50 代に経験した精神的・肉体的な変化を retrospective に振り返ることで「老い」について書くことにする。Prospective に見たものではないため recall bias が紛れ込んでいる可能性があるが、ご容赦願いたい。

50 代前半（50 歳～54 歳）：

結論を言うと、この期間に精神的・肉体的な変化（衰え）はなかった。50 代突入の前に周りの人から「50 過ぎたら衰えるで！」と言われていたが、後述するただ一点を除き杞憂に終わった。この時期、数回の海外出張を経験し、帰国後の時差ボケに苦しむこともなかったし、海外での学会発表もこなし、論文も書いたことからして、気力・体力は充実していた。また、申請後に怒涛のごとく押し寄せる照会事項への対応で完徹も経験したが、若いころ同様にやり遂げた。ただし、唯一困ったのが老眼である。もともと近視と乱視を併せ持っていたので、老眼に突入するのは遅いだろうと踏んでいたが、53 歳で無事（？）突入した（この歳に初めて遠近両用メガネをかつらえた）。具体的に言うと、PC の画面を見る際には 150% 程度に拡大しないと読めないし、11 ポイントよりも小さいフォントを使って印刷されたものは、読む気さえ起こらなくなった。

50 代後半（55 歳～現在）：

この期間は重要なので少し細かく書くことにする。55 歳～57.5 歳（この 0.5 歳がミソ！）では 50 代前半同様、精神的にも肉体的にも変化（衰え）はなかった。実際、この期間に毎年海外出張を経験し、帰国後に時差ボケで苦しむこともなく、海外での学会・研究会で発表もこなし（1 ヶ月間に 2 度の海外出張もあった）。また、対面助言出席のために東京出張も幾度となく経験したが、特段、肉体的な衰えは感じなかった（ただし、老眼の進行は別）。変化は 57 歳を半分ほど過ぎた時点で生じた。57 歳半ばを過ぎた頃、海外出張した際、以前は帰国後に 1 日ぐっすり睡眠をとることで体調は元通りになったが、このときは回復するまでに 3 日ほど要した。これを起点に東京出張の際にも変化が生じ、帰宅後にかなりの疲労感を覚えるようになり、足腰に痛みを感じるようになった。しかも、これらは翌日に持ち越すようになった。足腰の痛みは、ついに日常化することになり、週末のマッサージ通いも始まった。とどめは 50 肩の発現である。57 歳の時の年末、突然、左肩に強烈な痛みを感じ、腕が回りにくくなった。「これはいかん」と毎晩、竹刀の素振りをするようになった。そのお蔭で、痛みは消失したものの、腕が回りにくい症状は残っている。若い頃、剣道をやっていたお蔭で姿勢のよさには自信があったが、最近は油断するとすぐに猫背になり、かつ、全体的に左側に傾いてしまう。明らかに足腰と腹筋・背筋の衰えである。精神的な面では、

これら肉体的な衰えに付随して踏ん張りが利かなくなってきた。若いころにできた「夜中までかけて一気に仕事を片付ける」ことができなくなった。ただし、この副作用(?)として、仕事に対して強弱をつけるのがうまくなったと感じる。

以上、まとめると 57 歳前半までは肉体的・精神

的にもそれまでと同様に動けるが、57 歳後半から衰えが明らかになった。現時点で 40 代後半から 50 代前半の方々には、まずは体力の維持を今からでも心がけてもらいたい。体力が維持されれば精神的な衰えをきたすことなく働くことは可能と思う。

結論：健全なる精神は健全なる身体に宿る！

2. 2014 年度評議員会議事録

浜田 知久馬、佐藤 俊哉（庶務担当理事）

（2015-2016 期 新評議員による新理事選挙等）

日時：2014 年 10 月 31 日（金）18:00～18:45

場所：東京理科大学 神楽坂校舎 3 号館 5F

第 2 演習室

出席：安藤、伊藤、大庭、大橋、佐藤(泰)、丹後、野間、浜田、松浦、松山、山岡、山口、山本、和泉、魚住、大森、嘉田、佐藤(俊)、寒水、高橋、手良向、平川、富金原、松井

欠席：岩崎、小宮山、竹内、菅波、椿、船渡川、山中、折笠、角間、川口、坂本、大門、服部、濱崎、柳川、山本
[委任状 13 通]

出席者と委任状により、会則第 33 条に定められた定足数が満たされたことを確認し評議員会が開催された。会則第 32 条に従い互選により佐藤理事が議長となり、以下の議事を行った。

1. 評議員選挙結果報告

浜田選挙管理委員長より、評議員選挙の結果 40 名の評議員が選出されたこと、投票割合は $179/494=36.2\%$ （前回は $152/465=32.7\%$ ）であったことが報告された。さらに今後の会長候補者の信任投票について説明があった。

2. 2015-2016 年度会長候補者の選出

会長候補者について、佐藤理事から大橋靖雄氏が推薦され、出席評議員の全員一致で賛同が得られ、評議員会として大橋靖雄氏を会長候補者として推薦し、会員による信任投票を行うことが決定された。

3. 理事 9 名の選出

続いて理事の選出が行われた。議長より、細則第 3 条(3)では 10 名の理事を評議員の中から選出すると定められているが、「IBS の council member は理事に就任する」という規定に基づき、2017 年までの council member である服部聡氏は

理事に就任することが確認された。服部聡氏、会長候補者の大橋靖雄氏の 2 人を除く評議員 38 人を被選挙者として 9 名の理事を選出することが確認された。選出方法は出席評議員および委任状による事前投票者 12 人による（服部聡氏は大橋靖雄氏に選出委任）、9 名連記の投票により選挙を行い、上位得票者 9 名を理事とすることとした。浜田選挙管理委員長の下、開票が行われ、Council member を含めて、以下の 10 名の理事が選出された。

和泉志津恵、大森崇、佐藤俊哉、寒水孝司、高橋邦彦、手良向聡、浜田知久馬、服部聡、松山裕、松井茂之（敬称略）

4. 監事 2 名の選出

監事 2 名の選び方について審議し、会長候補者の会員による信任投票が済み、会長指名理事の 5 名を含めた、すべての理事が決定された後、評議員会（メールでの投票）で、理事以外の評議員から監事を選出することとした。

5. その他

会長候補者、大橋靖雄氏の、会員による信任投票を早急に行い、

日時：12 月 4 日（木）18:00～

場所：東京理科大学

を候補として、新旧理事会の開催を検討することになった。

3. 2014 年度理事会議事録

浜田 知久馬, 佐藤 俊哉 (庶務担当理事)

○ 2014 年度第 4 回対面理事会 議事録

日時：2014 年 9 月 15 日 (月) 12:00~13:00

会場：東京大学 本郷キャンパス小島ホール
1 階第 1 セミナー室

出席：大橋, 和泉, 大森, 菅波, 寒水, 高橋,
丹後, 椿, 手良向, 浜田,
山岡 (監事), 林 (監事)

欠席：佐藤, 服部, 松井, 松山, 三中, 森田
[委任状 4 通]

1. 庶務担当理事からの報告

庶務担当の浜田理事から, 学会会員数の報告があった。(2014 年 9 月 3 日時点で 596 人)

2. 編集担当理事からの報告

編集委員長の松井理事が欠席のため代理の高橋理事より, 「計量生物学」の発行および現在の投稿状況が報告された。通常号第 35 巻 1 号が 8 月下旬に発行済みであることが報告された。

3. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事より, ニュースレターの第 115 号が 8 月上旬に発行されたこと, 第 116 号 (11 月下旬発行予定) の発行スケジュールと掲載予定内容が報告された。

4. 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事より説明があった。

・2014 年度年次大会決算報告

チュートリアル (会計担当は応用統計学会) の収支はほぼゼロであったが, 年次大会は予算より収入が少なくなったため, マイナス収支となったことが報告された。

2012 年度年次大会以降, 会員への繰越金還元の意図で会員参加費を特例として値下げしているため, 大幅なマイナス収支を続けているが, 次年度には, 支出の調整や参加費設定の検討が必要であるとの報告があった。

・IBC2014 若手会員発表者補助

補助申請が 5 件あり, 審査後, 1 人 10 万円の補助を行ったことが報告された。

・委員および講師旅費補助申し合わせ事項, 研究分科会活動費申し合わせ事項の改定

① 「日本計量生物学会交通費および宿泊費の支給についての申し合わせ事項」の改定

② 「日本計量生物学会評議員会/理事会開催時の交通費および宿泊費の支給についての申し合わせ事項」の廃止 (①へ統合)

③ 「日本計量生物学会研究分科会活動費の支給についての申し合わせ事項」の改定を行ったことが報告された。

申し合わせ事項は, 会計担当理事の引継ぎ事項とし, 本会議欠席の理事にも「理事会議事録」によって確認してもらうことになった。

・その他

① 本年 2 回目の本部宛送金を 2014 年 8 月 28 日に行った。

② EAR-BC2015 LOC への補助 (100 万円) を行う。

③ シンフォニカへの事務バックアップ体制の依頼文書を会長, 会計担当理事, 庶務担当理事で作成する。

④ 2015 年度予算案を前倒しで作成する

5. 企画担当理事からの報告

企画担当の手良向理事より報告がなされた。

・2014 年度統計関連学会連合大会

計量生物シンポジウムで「メタアナリシスにおける最近の発展」, 「奨励賞受賞者講演」を行ったことが報告された。

・2014 年度計量生物セミナー

2014 年度計量生物セミナーは, 12 月 19 日 (金)・20 日 (土) にキャンパスプラザ京都にて, 「仮説検定における多重性の制御」をテーマとして企画中であることが報告された。オーガナイザーは, 長谷川貴大氏 (塩野義製薬), 森川敏彦氏となった。

・2015 年度年次大会

2015 年度年次大会は, 2015 年 3 月 12 日 (木), 13 日 (金) に京都大学芝蘭会館で開催を予定しており, 特別セッション案は, オーガナイザーを川口淳氏として「脳画像の解析と臨床応用」, チュートリアル案は, オーガナイザーを佐藤俊哉氏として「医薬品安全対策への電子診療情報の活用, MIHARI プロジェクト」で検討中であることが報告された。

・2015 年度計量生物セミナー

「臨床試験における estimand と missing data」で検討中であることが報告された。

・教育ワークショップ (仮題)

2015 年 1 月 9 日 (金) に京都大学で「プロフェッショナルリズム涵養のためのイグニッション・プログラム」を実施することが報告された。

また同日に計量生物学講演会を実施することも報告された。

会計理事への申し送り事項とすることになった。

6. 役員選挙について

浜田庶務理事より役員選挙(2015-2016 期)について報告があった。大橋会長から、選挙管理委員として、浜田知久馬氏(理事)と山本英晴氏(評議員)が指名されたこと、また、今後の選挙関連の日程(投票締切は10/9)などが報告された。

7. その他

- ・今後の理事会の予定
次回の理事会は、10月31日(金)18:00～東京理科大学で、新評議員会と同一日に開催。

○ 2014年度第5回対面理事会 議事録

日時：2014年10月31日(金)18:45～19:30

会場：東京理科大学 神楽坂校舎3号館5階
第2演習室

出席：大橋、和泉、大森、佐藤、菅波、寒水、高橋、手良向、浜田、松井、松山

欠席：丹後、椿、服部、三中、森田、山岡(監事)、林邦彦(監事)

[委任状4通]

1. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事より、ニュースレターの、第116号(12月上旬発行予定)の発行スケジュールの見直しと内容が報告された。

2. 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事より、繰越金の近年の変化についての説明があった。2015年の国際会員会費の見直し、年次大会の学生会員の参加費補助の継続について確認された。2015年のEAR-BCについては、補助(100万円)を行うこと、中国、韓国、インドの会長、庶務理事に対して旅費の補助を行うことが確認された。学生会員資格確認返信未着者については、庶務理事が対応することになった。講師等講演謝金基準額(案)が示され、承認された。この件は次期

3. 企画担当理事からの報告

企画担当の手良向理事より報告がなされた。

・2014年度計量生物セミナー

2014年度計量生物セミナーは「臨床試験における多重性の制御」で企画中であることが報告された。オーガナイザーは、長谷川貴大氏、森川敏彦氏、菅波秀規氏となった。現在までに51名の申し込みがあった。

・2015年度年次大会

2015年度年会は2015年3月12日(木)・13日(金)に京都大学芝蘭会館で行い、特別セッション案として、オーガナイザー川口淳氏による「脳画像の解析と臨床応用」、チュートリアル案として、オーガナイザー佐藤俊哉氏による「医薬品安全対策への電子診療情報の活用、MIHARIプロジェクト」を検討中であることが報告された。

・2015年度計量生物セミナー

「臨床試験における estimand と missing data」を検討中であることが報告された。

・教育ワークショップ

「プロの統計家のための教育プログラム」を2015年1月9日(金)に京都大学で実施することが報告された。また同日に計量生物学講演会「ICH 統計ガイドライン—試験統計家、非劣性試験、FAS はここからはじまった—」を実施することも報告された。

4. その他

・統計関連学会連合大会の委員について、プログラム委員に菅波秀規氏、運営委員に大門貴志氏、篠崎智大氏を推薦することになった。

・大森理事からカリキュラム策定委員会の報告があった。

・今後の理事会の予定

次回の理事会は、12月4日(木)18:00～、東京理科大学で新旧理事会を開催する。担当の引継ぎを行うので、各理事に引継資料の用意を依頼することになった。

4. 2014年度統計関連学会連合大会報告

手良向 聡、和泉 志津恵、菅波 秀規、服部 聡(企画担当理事)

2014年度統計関連学会連合大会は、2014年9月13日(土)より16日(火)にかけて、東京大学本郷キャンパスにおいて開催されました。参加者総数は1034名(チュートリアル参加者数223名、大会参加者数811名)の参加がありました。発表件数も318件にのぼり、盛大な大会となりました。

した。日本計量生物学会関連の内容につき、以下に報告いたします。

日本計量生物学会シンポジウム「メタアナリシスにおける最近の展開」

臨床試験等の証拠を系統的に収集し、総合的

評価を行う系統的レビューという方法論が開発され、結果を定量化するための統計解析手法としてメタアナリシスが発展してきました。近年は分析よりも統合に重きをおいた Evidence Synthesis という用語も一般的になりつつあります。本セッションでは、ネットワークメタアナリシスの方法と事例、メタアナリシスの応用事例ならびに新規方法の開発、および日本の取り組みについて議論が行われました。ネットワークメタアナリシスについて、野間久史氏（統計数理研究所）から利点と限界を含めた方法論の概説があり、藤井陽介氏（ファイザー株式会社）から統合失調症に対する抗精神病薬（15 薬剤）の評価への適応事例の解説がありました。ネットワークメタアナリシス特有の問題として、異質性の評価、公表バイアスの検出等が議論されました。大庭幸治氏（東京大学）はメタアナリシスを用いた代替評価項目の評価について、胃がんを対象とした国際的プロジェクトの実例を紹介されました。高橋邦彦氏（名古屋大学）は用量反応関係のメタアナリシスで生じる問題に対する具体的な解決策を実例とともに提案し、提案法が優れていることを示しました。最後に、八重ゆかり氏（聖路加国際大学）から 2014 年 2 月に我が国に設立された「コクラン共同計画日本支部」の紹介が行われました。今後、系統的レビューへの統計家の積極的な参画が期待されていると感じました。

日本計量生物学会 2014 年度奨励賞受賞者講演

2014 年度の日本計量生物学会奨励賞を受賞された野間久史氏（統計数理研究所）より、受賞対象論文「Multiple Imputation 法によるネステッドケースコントロール研究、ケースコホート研究の解析（計量生物学 33:101-124, 2012）」に関する講演が行われました。これらの疫学研究デザインが母集団からの 2 段階サンプリングに基づいていることに着目し、2 段階目でデザインによって生じる欠測を Multiple Imputation 法により統一的に対処しようとするものです。本成果は実践に役立つ可能性が高く、今後広く普及するのではないかと感じました。受賞者の今後のご活躍を期待いたします。



オーガナイザーと発表者ら

5. 2014 年度計量生物セミナーのお知らせ

菅波 秀規, 和泉 志津恵, 手良向 聡, 服部 聡（企画担当理事）

次の日程で計量生物セミナーが開催されます。皆さんの参加をお待ちしています。

『臨床試験における多重性の制御』

オーガナイザー：長谷川貴大（塩野義製薬株式会社）、森川敏彦（元久留米大学）、菅波秀規（興和株式会社）

主催：日本計量生物学会

共催：京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学系専攻 医療統計学

第一日目：12月19日（金）13:00～17:30（受付

12:30～）

第二日目：12月20日（土）9:00～16:00

場所：キャンパスプラザ京都・第1講義室（5階）

<http://www.consortium.or.jp/about-cp-kyoto/access> .

詳細については、学会 HP をご覧ください。

<http://www.biometrics.gr.jp/index.html>.

※申込み受付は終了しました。

6. 計量生物学講演会、計量生物学ワークショップのお知らせ

和泉 志津恵, 菅波 秀規, 手良向 聡, 服部 聡（企画担当理事）

2015年1月9日（金）午後京都大学において、計量生物学講演会および計量生物学ワークショップが開催されます。

申込受付期間：11月4日（火）～12月19日（金）

（<http://www.biometrics.gr.jp/news/all/20141107-1.pdf>, <http://www.biometrics.gr.jp/news/all/20141107-2.pdf>）. まず、13:30からの計量生物学講演会では、佐藤 俊哉 先生（京都大学）による『ICH

統計ガイドライン 一試験統計家, 非劣性試験, FAS はここからはじまった一』が予定されています. その後, 15:00 からの計量生物学ワークショップでは, 佐藤 恵子 先生 (京都大学) と鈴木 美香 先生 (京都大学) をお迎えして, 日本計量生物学会で採択した『統計家の行動基準』

をベースに、『プロの生物統計家のための教育プログラム』をテーマとした講演とグループワークが予定されています. とともに, 参加費は無料ですので, 皆様のご参加をお待ちしています. 詳細については, 学会 HP をご覧ください.

7. 2015 年度年会のお知らせ

手良向 聡, 和泉 志津恵, 菅波 秀規, 服部 聡 (企画担当理事)

2015 年度日本計量生物学会年会を 2015 年 3 月 12 日 (木) および 3 月 13 日 (金) 午前京都大学にて開催します. また, 3 月 13 日 (金) 午後同一会場にてチュートリアルを実施します (応用統計学会と共催). 年会の一般講演を募集しますので奮ってご参加下さい. 本年度も, 一般講演として口頭発表とポスター発表を募集いたします. 一般講演申込の詳細は下記の年会案内をご参照下さい.

本年会は応用統計学会の後援で実施され, 両学会員は本年会, 3 月 13 日 (金) のチュートリアル, および 3 月 14 日 (土) 開催の応用統計学会年会に, 会員価格で参加できます. また, 一般講演セッションで発表される学生会員の方には, 旅費の補助をいたします. 学生会員の方の積極的な発表をお待ちいたします. 参加費の詳細は以下をご参照ください. 本年会およびチュートリアルの参加につきましては, 原則として事前に参加申し込みをしていただきますよう, ご協力のほどお願いいたします. 参加申込には, 申込用紙をご利用ください

(年会案内に同封しています. もしくは学会 HP <http://www.biometrics.gr.jp/> をご覧ください).

年会・チュートリアルの会場および参加要領
会場

京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館 (稲盛ホール) <http://www.med.kyoto-u.ac.jp/shiran/> 〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 京都大学医学部構内 電話: 075-753-9337 (代)

参加費

事前申込: [申し込み期間]

2015 年 1 月 21 日 (水) ~ 2 月 20 日 (金)

	年会	チュートリアル
本学会員	2,500 円	2,500 円
応用統計学会員	2,500 円	2,500 円
非会員	4,500 円	4,500 円
学生 (会員・非会員とも)	1,000 円	1,000 円

年会・チュートリアルは一括申込をお願いします

当日申込:

	年会	チュートリアル
本学会員	3,000 円	3,000 円
応用統計学会員	3,000 円	3,000 円
非会員	5,000 円	5,000 円
学生 (会員・非会員とも)	1,000 円	1,000 円

チュートリアル

日時: 2015 年 3 月 13 日 (金) 13:30~16:00 (予定)

テーマ: 「医薬品安全対策への電子診療情報の活用 - MIHARI Project」

オーガナイザー: 佐藤俊哉 (京都大学), 山口拓洋 (東北大学)

講師: 竹内由則 (医薬品医療機器総合機構), 山口拓洋 (東北大学)

内容: 医薬品医療機器総合機構では, 安全対策業務の強化・充実策の一環として, レセプトデータ, 病院情報システムデータ等の電子診療情報を安全対策へ活用する体制を構築するための事業である「MIHARI Project」を実施している.

(http://www.info.pmda.go.jp/mihari_project/mihari_project_index.html) これまで MIHARI Project では, レセプトデータベース等を用いた, ネステッド・ケース・コントロール研究, 傾向スコアによる交絡調整の方法, 自己対照研究デザイン (Sequence Symmetry Analysis, Self-Controlled Case Series) の適用可能性の検討を行ってきた. 本チュートリアルセミナーでは, これらの手法について解説し, MIHARI Project で実施した調査の実例を紹介する.

2015 年度日本計量生物学会年会

日時: 2015 年 3 月 12 日 (木) ~ 13 日 (金) 午前

特別セッション：3月12日（木）午後（予定）
セッション名：「脳画像の統計解析と臨床応用」
オーガナイザー・座長：川口淳（京都大学）
趣旨：脳画像は精神神経疾患領域などで、疾患のメカニズムを知る、もしくは早期発見などで必須の測定技術として確立されている。脳画像から知見を得るために統計学が用いられており、そのデータ構造は遺伝子解析と同様に高次元であり、さらには複雑な時空間データである。近年の臨床研究においても、古典的な解析法にとどまらず、このようなデータ構造を考慮した先端的な手法が用いられており、さらに多様化する脳画像を解析するための方法の開発または効果的な適用は生物統計学的にも挑戦的課題だと考えられる。

このような背景から、本セッションでは脳画像のうち、賦活、代謝などの機能をみる機能的脳画像と萎縮など脳形態をみる構造的脳画像に大分し、その両方において臨床側と統計側からの研究内容についての講演を予定している。臨床研究、統計解析の両側面からの脳画像研究についての最新情報として計量生物学会員に有益な情報が提供されることを期待する。

演者・演題：

- 1) 山下典生（岩手医科大学医歯薬総合研究所 超高磁場 MRI・診断病態研究部門）
「脳画像解析 overview」
- 2) 川口淳（京都大学大学院医学研究科 医学統計生物情報学）
「構造的脳画像を目的変数とする方法」
- 3) 松田博史（国立精神・神経医療研究センター 脳病態統合イメージングセンター）
「MRIによる Voxel-based morphometry の臨床応用」
- 4) 山下宙人（ATR 脳情報解析研究所 計算脳イメージング研究室）
「ヒト脳活動ダイナミクスに迫る方法」
- 5) 福山秀直（京都大学医学研究科附属脳機能総合研究センター）
「脳機能画像の臨床応用－基本から応用まで－」

特別講演：3月12日（木）午前（予定）

2014年日本計量生物学会賞受賞者講演

演者：松井茂之（名古屋大学）

演題：「計量生物学の更なる可能性を求めて」

一般講演の申し込み

以下の分野毎に演題を募集します。

A. 臨床試験・臨床研究, B. 臨床診断学, C. 疫学, D. ゲノム・バイオインフォマティクス,

E. 資源・環境・農業, F. 事例研究, G. その他

応募の際には、ご希望される分野名を必ずご指定下さい。分野毎の演題募集には、学会の独自性・特色をより打ち出し、専門性を深めるといふねらいがあります。分野毎に、より踏み込んだ活発な議論を期待しております。会員の皆様の積極的なご発表をお願いいたします。

口頭での発表を希望するかポスターでの発表を希望するかを、申し込み時にお申し出ください。希望を最大限尊重いたしますが、プログラム編成の都合上、発表形式の変更をお願いする場合がございますことをご了承ください。

一般講演をされる学生会員の方に、50,000円を上限として旅費の援助をいたします。以下の(5)をご参照ください。

(1) 申し込み方法

発表者氏名、所属（共同の場合は全員の氏名、所属）、講演題目、発表の形式（口頭、ポスター）、連絡先、学生会員は旅費の補助を希望するか否かを明記の上、電子メール、ファックスあるいは葉書で下記にお送り下さい。また、**Biometric Bulletin** への掲載のためにお手数ですが、講演題目、発表者氏名、所属についての英語版も合わせてお送り下さい。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6
能楽書林ビル 5階

(財) 統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局

E-mail: biometrics@sinfonica.or.jp

Fax: 03-3234-7472

HP: <http://www.biometrics.gr.jp/>

(2) 発表申し込み受付開始 2014年12月20日（土）

(3) 発表申し込み締め切り 2015年1月20日（火）

(4) 予稿原稿締切（必着）2015年2月3日（火）

ご講演を申し込まれた方には予稿原稿執筆要領をお送りします。

(5) 学生会員に対する旅費の補助について

若い皆さんに積極的に研究発表の機会をもつていただくべく、本年会において演題発表を行う「学生会員」のみなさんに旅費の補助を行うことにしました。たくさんの学生会員のみなさんの発表をお待ちしています。

○ 対象者：本人が講演者となって一般講演セッションで演題発表を行う学生会員（口演、ポスターを問いません）

○ 補助額：一人あたり 50,000円を上限として旅費を補助

○ 申込方法：補助を希望する対象者は年会の講演申込の際にあわせて「旅費等補助希望」と連

絡してください。参加申込み・参加費支払いを各自で行っていただき、学会終了後、補助金額を本人に学会からお支払します。ただし、申込多数の場合にはご希望にそえない場合があります。補助が決定した方には別途事務局より手続き方法について連絡します。

なお、今回の補助は講演申込にあわせて日本計量生物学会に入会申込した学生さんにも適用されます。学生会員の年会費は無料となりますので、周囲で日本計量生物学会に入会していな

い学生の方にもこの機会に是非入会と発表を勧めてください。

その他

- ・年会期間中に日本計量生物学会総会および学会賞授与式、ならびに評議員会を開催します。
- ・3月14日(土)には応用統計学会年会在本年会と同会場にて開催されます。参加費は正会員、後援学会員3,000円、非会員5,000円、学生(会員、非会員とも)1,000円です。

8. 2015 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

菅波 秀規 (連合大会プログラム委員)

2015 年度統計関連学会連合大会は 2015 年 9 月 6 日 (日) から 9 日 (水) まで岡山大学津島キャンパスにおいて開催されます。9 月 6 日に、チュートリアルセッション及び市民講演会、9

月 7 日から 9 日までは、企画セッションなどの一般講演に加えコンペティションなどを予定しています。予定表に記載し、奮ってご参加願います。

9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

9.1 治療法の開発・評価に対する時代の要請にどう応えるか

柴田 大朗 (独立行政法人 国立がん研究センター)

昨今の臨床研究実施体制の整備の流れもあり、生物統計学の専門家の需要はますます高まってきています。私は国立医薬品食品衛生研究所 医薬品医療機器審査センター (現 独立行政法人医薬品医療機器総合機構) での生物統計担当の審査官を経て、その後、独立行政法人国立がん研究センターでがんの多施設共同臨床試験の計画・実施・解析に関与して来ましたが、その短い社会人経験の間ですら、生物統計学を専門とする方々が身近なところで相当に増えてきたことを実感します。

現在、国立がん研究センターには 5 名の常勤の生物統計家 (管理職 2 名を含む) がおり、経験・経歴や得意分野が異なるメンバーがお互いの長所を生かし、各々の苦手なところを補うなどしつつ仕事をしています。主な仕事は恒常的多施設共同臨床試験グループにおける臨床試験の立案・計画の段階から結果の公表に至るまでの一連の経過に関与することですが、それと共に、国立がん研究センター内部の研究者を対象とした生物統計学に関するコンサルテーションの仕組みを昨年からは設けています。また、試行的に一部の診療科の journal club に参加し、論文を読み解く際に生じる統計学的な論点についてディスカッションをするなどしています。その他にも、弊センター

には、生物統計学の専門家とは別に疫学やバイオインフォマティクスなどの専門家も多数在籍していますので、計量生物学領域の専門家を擁する研究機関としては恵まれた環境であると日々感じています。

そのような良い環境にしながらこれまで自分が何をしてきたのかと自問自答してみると、「未来に向けて」何かを語る資格があるか逡巡するところもありますが、最近気になっていることを取りあげ綴ってみたいと思います。

これまで一貫して治験を含む臨床試験に係わる仕事に携わってきましたが、同じ臨床試験といっても、評価しようとするものは多様です。臨床試験というとはほとんどの方は医薬品や医療機器の評価を行うものをイメージされると思いますが、実際にはそうではありません。手術や放射線治療を評価する臨床試験もありますし、医薬品を用いる臨床試験であったとしても手術や放射線治療との組み合わせを評価する試験も多く行われています。また、医薬品を評価する臨床試験の場合であっても、単に薬事承認を得るために有効性の有無を確認するのみならず、既存の他の治療法との関係を調べるもの (いずれの治療法を第一選択として用いると良いかを調べる試験等) もあります。

特に最後の点は古くから指摘されてきたことではありますが、昨今の医療を取り巻く経済的な環境の変化に伴い改めて議論の対象となってきた感があります。一例としては、医薬品の価格をどのように定めるべきかという議論をするにあたって、単に薬事承認を取得するためのエビデンスでは不十分であるとの指摘が諸外国でなされるようになってきています。本邦では、ある医薬品の使い方に関する薬事承認と公的医療保険制度の適用となることとがほぼ一対一に対応していることからこれまで曖昧にされてきた感がありますが、そのような本邦においてすら、薬事承認を取得した医療機器の一部は保険診療下での使用が認められず、その可否判断のための「評価」を先進医療制度の下で行っているという事例もあります。すなわち、薬事承認を得るために必要なエビデンスと、保険適用の可否判断・保険適用に際しての経済的価値判断に必要となるエビデンスとは異なるということです。私たちはこれまでこの点について少し無頓着だったのではないのでしょうか？

常々、日本の薬価は諸外国に比較して安いと言われていますが、実はその医薬品の価格の定め方が英国、ドイツ、フランスなどでは厳しくなってきたり、既存薬に優るメリットを基礎研究ではなく臨床効果として示すことができなければ先行する同効薬よりも安い価格しかつけられないであるとか、時には、新規作用機序の医薬品であっても後発品レベルの価格しかつけられないという「事件」すら起きています。

手短かに言うと、医薬品に係わる経済評価が求められるようになってきた、とまとめることができますが、これは臨床試験や薬剤疫学・臨床疫学研究等を通して何らかの形で「価値」の評価が求められているということです。

9.2 数学・統計学をめぐる「変化」と社会・医療への貢献

野間 久史（統計数理研究所）

京都大学で学位を取得してから、現在の統計数理研究所の助教職に着任し、はやくも3年が経とうとしています。ちょうど九州の大学を卒業して大学院に進学した年、赤池弘次元所長が京都賞を受賞され、幸運にもその受賞記念講演を拝聴する機会を得て、大きな感銘を受けたのですが、当時は、まさか私などが我が国を代表する統計数理の研究機関で働くことができるとは思っていませんでした。研究所での仕事は、いわゆる数学系の学部の助教職と似たようなもので、もともと数学の研究では、調査や実験を行う必要がない反面、個々の研究に膨大な思索と時間・精神的なエネルギーを要するため、基

ここでは「事件」と書きましたが、例えばプラセボ対照試験によって薬事承認を取得した医薬品が、既存薬に優るエビデンスがないために低い価格しかつけて貰えないと判断されたとして、よく考えてみればそれは当然のことではないかとも思います。高い価格がつけられるべきであると主張するのであれば、その主張の根拠を自ら提示することが必要です。臨床試験を実施するにあたって生物統計家の関与が必須であるということは（実態はまだまだではありますが）認知されてきていますが、一方で、私たちは個々の臨床試験によって得られたエビデンスがどのような形で社会的な判断なり意思決定に寄与するのかということについても無頓着ではいられない状況になってきたと感じます。

科学的な実験は価値観や価値判断からできる限り距離を取って行われるものですが、こと治療法の評価に関しては科学的な実験の方法論を下敷きにしつつもプラス α （価値判断）が求められているという現実から目を逸らし続けることはできないのではないかと、ということです。

私たちはそのような社会的要請に応える準備（あるいは覚悟）ができていますでしょうか？

・・・などと書くと、何となく息苦しくなってしまうかもしれませんが、新しい治療法を評価するための研究の方法論に関してまだまだ開拓すべき領域が目の前に広がっているというように前向きに捉えれば良いのかもしれない。応用の場面で臨床医などの他職種の専門家と共に日々の仕事に取り組みつつもそれに留まることなく、このような時代の要請に対して計量生物学の領域の専門家同士で議論を深めていくことができれば、と考えています。

本的には自由な時間を多く与えていただくことができ（それに見合った成果を出すことは当然の責務であるわけですが）、着任して早々の頃には、一日中、自分の論文を書いて思索に耽るだけで日が暮れるということもありました。しかし、私のようにいろいろな物事を気軽に引き受けてしまう性分の者は、あまりそういった自由で平穏な時間（？）を持つことには縁がないらしく（また、生物統計家として、貴重なお仕事のお誘いをいただく機会にも恵まれ）、気がついたらいつの間にか、職場のデスクには、山のように書類が積まれており、上司からも「普通、統計の研究者は助手（助教）の頃が一番自由で

楽しく研究ができるものだけど、君は違うね」とからかわれたりもしています。

一方で、そのような数学・統計学をめぐる環境も、着々と変化を続けており、私見ではありますが、特に近年、産業界・諸科学との協働や連携による、社会に着実に還元できる成果を上げていくことが重要視されるようになりつつあるように感じています。その代表的なもののひとつとして挙げられるのが、文部科学省の「数学協働プログラム (<http://coop-math.ism.ac.jp/>)」です。このプログラムは、数学・数理科学と産業界・諸科学の協働による具体的課題解決に向けた共同研究を促進することを狙いとして、統計数理研究所が中核機関となり、全国の8つの研究機関との連携のもとで実施されているプログラムです。私自身も、専門外ではありますが、宇宙航空研究開発機構 (Japan Aerospace Exploration Agency; JAXA) との協働プロジェクトを担当することとなり、航空機の設計に関する実験データの分析に汗を流しています。私が大学生であった頃の10年ほど前、徐々にそのような気運が高まってきていることは学生ながらに感じてはありましたが、この10年間で、数学の研究者・研究機関が、このような事業にここまで本格的に取り組むことになったということは少し意外なことのように思っています (私自身は、そのような機会を希望して、大学院から医学系の研究科に進学したわけですが)。このような変化が起きたひとつの契機を見るための資料として、文部科学省科学技術政策研究所から発行された「忘れられた科学—数学：主要国の数学研究を取り巻く状況及び我が国の科学における数学の必要性 (細坪護著ら、2006年5月；<http://www.nistep.go.jp/achiev/ftx/jpn/pol012j/idx012j.html>)」という文書があります。この中でも『数学—他分野融合研究から得られる社会的利益は巨大であると推測され、日本でも数学—他分野融合研究を振興すべき』『ライフサイエンス、情報工学、ナノテクノロジー等の多くの分野の研究者は、今後の研究発展に対する数学の必要性を感じている。欧米ではそのための数学研究者との協力体制が整っているのに対して、日本では遅れていると彼らは考えている』などといった文言が見られます。これらの関係文書では、残念ながら医学領域における生物統計学は取り上げられておりませんが、我々の研究領域こそ、

長らく対外的な協働と連携に成功を収めてきた分野であり、近年になってますます、本邦の医学研究において必要不可欠な分野として重要視されるようになったことは、より一般にも広く知られてよいように思います。

一方で、本邦において、数学が「忘れられた科学」なのであれば、統計学も長らく「忘れられてきた科学」といえるのかもしれませんが。諸外国と比較して (周辺のアジア諸国に比べても)、我が国において、「統計学科」という統計学専攻のための学科を持つ大学がひとつも存在しないというのは、やはり異例のことであるといえるかと思えます。先の文書において、産業界や諸科学からのニーズは「数学」だけではなく、当然ながら「統計学」にも多くあるように思います。また、我々の生物統計学の領域でも、現在、本邦では、医学アカデミアにおける極端な人材不足が起こっておりますが、米国などでは、人材育成の体制も充実しており、多くの優秀な人材が活躍できるキャリアパスも十分に確立されているように思います。現代に至っては、「ビッグデータ」「(新しい意味での) データサイエンス」などの新たなイノベーションに向けての枠組みも登場しつつありますが、これらは統計学の高い専門性を持つ人材 (国際的にトップレベルの専門性・実務能力を持つ人材) が十分にいないと、諸外国との厳しい競争に競り合っていくことは難しいのではないかとも思われます。また、将来に渡って思考をめぐらせれば、同様のニーズの高まりは確実に起こるものと思われまます。このような重要な役割を果たすのは、ともかくも「人材」であると断言できるのでしょうか？ 長く将来に渡って、これからますますの変化を求められるこれらの領域をリードしていく高い資質を備えた人材をどのように養成していくかについては、我々若い世代も、真剣に考えるべき課題であると思われまます。

以上のような数学・統計学をめぐる「変化」は、今後の生物統計学の重要性をますます後押しするものであると考えることはできますし、一方で、これによって、我々にも、ますます社会や医療への着実な貢献が求められていくことも予想されます。私も、この手でできる役割を果たすために、より一層の精進をして参る所存です。

10. 学会誌への投稿のお誘い

松井 茂之, 三中 信宏 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多い

かもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただいていたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

11. 2015年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

椿 広計, 松山 裕 (学会賞担当理事)

日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。

この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞

功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛にお送りください。受賞者の発表と表彰は3月の日本計量生物学会総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします(推薦者は非公表です)。

推薦書の様式：A4 版 1 枚に，日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と 14 ポイントで書き，本文は 10.5 ポイントで以下の内容をご記入下さい．資料の添付等は自由です．

- 1) 被推薦者氏名，所属，連絡先（住所，電話，e-mail）
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数の場合は全員）
- 5) 推薦者（複数の場合は代表者）の所属

12. 編集後記

師走の声を聞いた途端に，九州では風雪の予報が流れました．今年を振り返ってみると，春の年会・チュートリアル，夏の IBC2014，秋の連合大会，冬の計量生物セミナーなどの行事のお知らせや報告が，会員の皆様からの賑やかなお声とともに，会報の紙面を埋めました．これらの行事における研究成果の発表やその後の交流から，この学会内の元気がさらに上がった感があります．ご多用の中，生き生きした原稿を寄稿していただいた皆様に，編集者一同，心よりお礼を申し上げます．この会報の記事をとおして，会員の皆様に学会の活動をより身近に感じていただけるお役に立てることを願います．

これまでの 6 年間の会報作りを振り返ってみると，事務局の田澤様と編集者 2 名との息の合ったチームワークにて，短期間の編集作業を軽やかに乗り切りました（互いの見えていないところで，息が多少上がっていたかもしれませんね）．この経験の中で，先輩の編集者から親身なご指導をい

および連絡先（住所，電話，e-mail）
推薦締め切り期日：平成 27 年 1 月 31 日（必着）

推薦書送付先：

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6
能楽書林ビル 5 階

（財）統計情報研究開発センター内
日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

ただき，そして後輩の編集者のスピーディな成長を見守り，このような素敵な仲間とのご縁に恵まれたことを，とてもうれしく思います．春とともに，新旧交代の声が聞こえてきそうです．

来年，2015 年 1 月から IBS の Council Member として，日本のみなさまのお声を IBS Committee へ届けるお役目を担うことになりそうです．幸いなことに，恩師のひとりである Elizabeth Thompson 教授(University of Washington, U.S.A.)も，同時期に次期会長としての任期を始められます．穏やかなお人柄で，周りの人の話を親身に聞いてくださる彼女との交流をとおして，IBS の本部と支部との間の絆がより強く結ばれますよう努めて参りたいと考えています．これからも，みなさまに気軽にお声をかけていただければ，うれしく思います．

（雪帽子をかぶった由布岳より）

日本計量生物学会会報第 116 号
2014 年 12 月 12 日発行

発行者：日本計量生物学会
発行責任者：大橋靖雄 編集者：和泉志津恵，寒水孝司